

# 声聞の離欲と菩薩の大悲

— *Nayatrāyapradīpa* 梵文校訂と訳注 (2) —

加納和雄・李学竹

## はじめに

先稿（加納・李 2020）に引き続き本稿では、声聞・大乘（顕教）・密教の優劣を論じるトリヴィクラマ（9-10 世紀ころ）の著作『三理趣灯火』（*Nayatrāyapradīpa*）の梵文校訂テキストと和訳を提示する。本書は声聞理趣・波羅蜜理趣・真言理趣という三理趣の関係を主題とするテキスト群の中でも早期に成立したものである<sup>1</sup>。本稿で収録するのは、『三理趣灯火』の梵文写本では fol. 3v4-8v6 に相当し、声聞に対する大乘の優越性を論じる第四偈～第九偈およびそれに付随する散文箇所である。

## 内容概観

本稿の収録範囲は内容的に二分しうる。前半では不二智が、後半では大悲が主題とされる。

前半の冒頭では、真実が本不生であることの経証として様々な大乘經典などが引用される（Skt 3v4-4v7）。これらはカマラシーラ作『一切法無自性論証』（\**Sarvadharmāṇiḥsvabhāvatāsiddhi* = *SDhNS*）所引の教証を再録したものであり<sup>2</sup>、このことにより本書はカマラシーラを知っていたと考えられている。つづいて、声聞に対しては不二智が説かれなかった理由を明かす。つまり、声聞が自利および四諦説という狭い目的にばかり終始して無我を曲解してしまうので、彼らに対しては不二智が説かれなかったとする（Skt 5r5-v1）。

その後には声聞からの論難が挙がる。すなわち、真実智（声聞にとっては四諦の智）を会得するには誓戒（*vrata*）や頭陀（*dhuta*）などの厳しい努力が必

<sup>1</sup> 同テーマを扱う早期の別の例としては、ほぼ同じ時代に活躍したアーリヤデーヴァ（9 世紀初頭）の *Sūta* (= *Caryāmelāpakapradīpa*, Wedemeyer 2007: 461-462) も指摘できる。

<sup>2</sup> 磯田 1979: 98、Moriyama 1985 参照。

要であり、それを欠如する大乘の不二智は、真実へと至るための副次的な方便智に過ぎないと難じる（Skt 5v1-3）<sup>3</sup>。

声聞からのこの論難を斥けるために、第四偈とその注は、不二智が単なる副次的な方便としての智ではないことを明かすための経証を列挙する（Skt 5v3-6r2）。その中で『楞伽經』から数偈が引用されるが、異読から判断するとカマラシーラの『修習次第初篇』からの孫引きである可能性が高い。その理証を担う第五偈とその注は、離一多性に言及するも、その具体的な記述を割愛し、「すでに『勝義灯火』（*Paramārthapradīpa*）の中で確定した」と述べて、自著と思しきテキストに委ねる（Skt 6r2-4）。不二智（真実智）を主題とした議論は以上である。

続く後半では、大悲が主題となる。真実智（大乘にとっては不二智）の会得のために厳しい努力の必要性を主張する声聞説を斥けるために、もし苦行と真実智会得との間に因果関係を認めてしまうならば、より厳しい異教徒の苦行こそが真実智をもたらすはずだという不合理な帰結を招くと指摘する（Skt 6r4-v1）。

そして声聞が重視する離貪について、大乘の場合、むしろ衆生への愛着、すなわち大悲という「貪欲」が菩薩にとって欠かせないことを第六偈で論じる（Skt 6v1-5）。

これに対して声聞側からは、貪は煩惱なので真実智を会得するための基盤にはなりえないとする論難が挙がる（Skt 6v5-6）。これに応じて第七偈と注は、利他をめざす菩薩の「貪欲」たる大悲こそが真実智の獲得のために有益であると説く（Skt 6v6-7v2）。

さらに、「貪」と「離貪」に固執する声聞をたしなめるために、それらが概念の域を出ない、実体なきものであることを論じ、そのようなものに固執するよりも、むしろ真実智の会得に直接つながる行いが何であるかを深慮するほうがよほど有益であると促す（Skt 7v2-3）。

そして大乘の大悲にもとづく衆生済度の行い自体が自他への執着を離れているのだから、大悲は我執という貪を引き起こす因子にはなりえないと付言する

<sup>3</sup> ここでは声聞が大乘の不二智を、四諦を会得するための「方便としての智」と位置付けるが、この発言は先に第二偈と第三偈に説かれた、声聞の四諦の智を、方便としての智と位置付けた大乘側の発言への応酬となっている。

(Skt 7v3-6)。

この後には傍論として、大悲の永続性が議論される。まず第八偈では、そのような大悲は、永遠に止まらない「ろくろの回転」のように、ひとたび発現したならば、その勢いは慣性力となって留まるところを知らないという<sup>4</sup>。その発言に対して、現実の「ろくろの回転」は、勢いが弱まればいつかは止まってしまわないかという論難がなされる。その答えとして、ろくろはいずれ停止するけれど、大悲は決して停止せずに永続するのであり、ろくろの喩例はあくまで喩例に過ぎず、喩例という表現方法自体に限界があるという。その例として、たとえば勇敢な人間を喩えて「人虎」と言う場合に、その人間に本当に虎の爪や牙が生えているわけではないという齟齬を指摘する (Skt 7v6-8r5)。

第九偈とその注では、身体的な能力は訓練をやめると衰えるが、大悲という精神的な能力には衰えがないという。そのような衰えがない理由として、認識はひとたび顛倒を離れると顛倒が再発しないこと、および大悲が衆生済度の誓願に固く裏付けられていることに言及する (Skt 8r5-v5)。

最後に、衆生済度をめざす菩薩行を称賛し、一連の真実智と大悲をめぐる議論を締めくくる (Skt 8v5-6)。

以上が本稿の収録範囲である。この後には、声聞および異教徒に対する大乘の優越性を論じる一連の偈（第十～十五偈）が続き、さらには大乘の中でも真言理趣がとりわけ勝れていることを論じる一連の偈（第十六～二十偈）が続く（次稿以降で扱う。前稿脱稿後、第十二偈の存在に気付いた為、偈番号を改めた）。

前稿で提示した箇所引き続き本稿で扱う箇所においても多くの文言が、ダルメーンドラ作の『真実真髓集』(*Tattvasārasamgraha*)<sup>5</sup>の中で借用されており、その都度、注記した。

## 科段

前回および今回扱う箇所の科段をまとめて示すと下掲の通りである。略号として用いた Tib. は、本書の蔵訳のデルゲ版 (D3707) の所在を示す。太字で示した箇所が本稿収録範囲である。

<sup>4</sup> 関連して、慈悲の習熟 (abhyāsa) などに関するダルマキールティの議論については、生井 1996、Eltschinger 2011などを参照。

<sup>5</sup> 同書については酒井 1985、Szántó 2020を参照。

[冒頭偈] (Skt. 1v1-2, Tib. 6v6-7r1)

[大乘の理趣：不二智が真実である]

[第一偈：不二智は仏説] (Skt. 1v2-3, Tib. 7r1)

(真実とは不二智である) (Skt. 1v3-6, Tib. 7r1-4)

[声聞の理趣：真実とは四諦である] (Skt. 1v6-2v1, Tib. 7r4-v5)

(四諦はプラマーナを備える) (Skt. 2r2-4, Tib. 7r7-v1)

(四諦は仏説に根拠がある) (Skt. 2r4, Tib. 7v1-2)

(律などに不二智は説かれない) (Skt. 2r4-v1, Tib. 7v2-5)

[大乘の理趣：四諦は方便である] (Skt. 2v1-2, Tib. 7v5-6)

[第二偈：四諦は方便であり真実は勝義のみを自体とする]

(勝義のみが真実、苦は真実にあらず) (Skt. 2v2-4, Tib. 7v6-8r1)

(声聞：苦諦は真実) (Skt. 2v4-5, Tib. 8r1-2)

(大乘：苦諦は方便) (Skt. 2v5-3r3, Tib. 8r2-7)

[第三偈：苦などは諦ではないが慈悲心によって声聞のため説かれた]

(苦は諦ではない) (Skt. 3r3-5, Tib. 8r7-v2)

(苦諦は転義的な表現にすぎない) (Skt. 3r5-6, Tib. 8v2-3)

(苦が諦ではないことの教証) (Skt. 3r6-v3, Tib. 8v3-6)

(四諦がプラマーナを備えることへの論駁) (Skt. 3v3-4, Tib. 8v6-9r1)

(※以下、本稿収録範囲)

(真実が本不生であることへの経証) (Skt. 3v4-5r5, Tib. 9r1-10r4)

(律などに不二智が説かれなかった理由) (Skt. 5r5-v2, Tib. 10r5-7)

[大乘の不二智は方便ではない]

(声聞説—不二智は方便に過ぎない) (Skt. 5v2-3, Tib. 10r7-v2)

(大乘説—不二智は方便ではない)

(第四偈：仏説による裏付け) (Skt. 5v3-6r2, Tib. 10v2-11r1)

(第五偈：プラマーナによる裏付け) (Skt. 6r2-4, Tib. 11r1-2)

(苦行や離欲は智の獲得にとって無益である) (Skt. 6r4-v1, Tib. 11r3-6)

[菩薩の欲望は大悲である] (Skt. 6v1-3, Tib. 11r6-12r5)

(第六偈：菩薩の喜捨と衆生への愛着) (Skt. 6v3-6, Tib. 11r7-v3)

（第七偈：菩薩の貪は浄化されている）（Skt. 6v6–7v2, Tib. 11v3–12r5）

（離欲に固執することへの批判）（Skt. 7v2–3, Tib. 12r5–7）

（顛倒した貪と顛倒なき貪）（Skt. 7v3–6, Tib. 12r7–v2）

〔傍論：顛倒した貪の放棄と顛倒なき貪として的大悲〕

（第八偈：慈悲の潜在慣性力）（Skt. 7v6–8r1, Tib. 12v2–3）

（声聞：ろくろもいつかは止まる）（Skt. 8r1–2, Tib. 12v3–4）

（大乘：譬喩はあくまで譬喩にすぎない）（Skt. 8r2–5, Tib. 12v4–7）

（慈悲の永続性）（Skt. 8r5–6, Tib. 12v7–13r7）

（第九偈：無顛倒なる潜在慣性力）（Skt. 8r6–v5, Tib. 13r1–7）

（第七偈のまとめ）（Skt. 8v5, Tib. 13r7–v1）

### 梵文校訂および訳注について

本稿で提示する梵文校訂テキストと和訳は *Nayatrāyapradīpa*, fol. 3v4–8v6 に相当する。校訂テキストは、中国蔵学研究中心に影印の紙焼きの形で保管される同書の梵文写本を底本としている。写本については前稿を参照されたい。

下掲の校勘記の中で異読や訂正（emendation = em.）は適宜注記するが、写本特有の綴り字や連声の標準化（ś/s の交替も含む）、アヴァグラハの追加、および分節の添削については煩を避けるため逐一報告しない。

和訳は、筆者の校訂した梵文の構文と内容の理解を示す目的で、便宜的に付したものである。和訳において、角括弧 [ ] は訳文の補足を示し、丸括弧 ( ) は追加説明を示す。

### 本稿で使用する記号と略号

太字 *Nayatrāyapradīpa* 本偈

conj. conjecture 暫定的な訂正

em. emendation 訂正

*SDhNS* \**Sarvadharmaniḥsvabhāvatāsiddhi* (D3889)

→ ← *Tattvasārasaṅgraha* (D3711) と一致する箇所

## 梵文校訂テキスト

（真実が本不生であることへの経証）（Skt 3v4–5r5, Tib. 9r1–10r4）

→ ādyanutpannatā tu bhagavatānantasūtrānte pradarśitā |<sub>(3v5)</sub> tatra *hastikakṣasūtre*  
'bhihitam——

na kaścil labhyate bhāvo yasyotpādasya sambhavaḥ |  
niḥsvabhāveṣu<sup>6</sup> bhāveṣu bālaḥ sambhavam icchati ||<sup>7</sup>

iti || tathā *ratnākare* deśitam——

yasya naiva hi<sub>(3v6)</sub> svabhāvu vidyate  
'sau 'svabhāvu parapatyayaḥ katham |  
asvabhāvu paru kiṃ janiṣyatiṭy  
eṣa hetu sugatena deśitaḥ ||<sup>8</sup>

iti || *mahatyām cāryasāgaranāgarājapariprcchāyām* apy uktam——

pūrvā<sub>(4r1)</sub>ntaśūnyā aparāntaśūnyā utpādabhaṅgasthitibhāvaśūnyāḥ |  
na caiva bhāvo 'sti na cāpy abhāvaḥ śūnyāḥ svabhāvena hi sarvadharmāḥ ||<sup>9</sup>

<sup>6</sup> niḥsvabhāveṣu] Ms. Cf. asambhāveṣu *Bhāvanākrama* I (ed. Tucci), 200,6.

<sup>7</sup> *Hastikakṣyasūtra*, D207, 105a6 : T vol. 17, 785b8-9 : T vol. 17, 779b21-22. Quoted in the  
\**Sarvadharmaniḥsvabhāvatāśiddhi* (= *SDhNS*), D3889, 86a7 (= Moriyama 1985 : 73, cf. 41 n.  
101) and *Bhāvanākrama* I (ed. Tucci), 200,4-6. See Ichigo 2011 : 23 n. 108.

<sup>8</sup> *Ratnākaraśūtra*, D124, 285b3-4 (gang gis ngo bo nyid ni mi rnyed par || rang bzhin de med ji ltar  
gzhan gyi rkyen || rang bzhin med pa gzhan gyis ci zhiḡ skyed || rgyu de bde bar gshegs pas bstan  
pa'o ||). Quoted in *SDhNS*, D3889, 86a6-7 (= Moriyama 1985 : 73, cf. 42 n. 102) and *Prasannapadā*  
(ed. MacDonald), 300,8-301,2 (yasya naiva hi sabhāvu labhyate so'sabhāvu parapatyayaḥ katham  
| asvabhāvu paru kiṃ janiṣyati eṣa hetu sugatena deśitaḥ). Metre : Rathodhdhatā (11 syllable,  
reading para- as one syllable).

<sup>9</sup> *Āryasāgaranāgarājapariprcchā*, D153, 192a2-3 (sngon gyi mtha' stong phyi ma'i mtha' yang stong

iti ||<sup>10</sup> *āryasamādhirāje* coktam——

yathaiva ārdram<sub>(4r2)</sub> kadalīyaskandham sārāthikah puruṣa vicārayeta |  
adhyātmabahirdhā na ca sāram asti tathopamāṃ jānatha sarvadharmān ||<sup>11</sup>

iti || *buddhasaṅgītāv* apy uktam——

katamā yoniśaḥ pṛcchā<sub>(4r3)</sub> katamā cāyoniśaḥ | āha | anutpādo yoniḥ | tasya  
pṛcchā yoniśaḥ pṛcchā ||<sup>12</sup>

iti || *punas tatraivoktam*——

cakāramukhāḥ<sup>13</sup> sarvadharmās cyutyupapattivigatāḥ | svabhā<sub>(4r4)</sub>-  
vamukhāḥ<sup>14</sup> sarvadharmāḥ svabhāvaśūnyatām upādāya ||<sup>15</sup>

---

|| skye dang' jig dang gnas pa'i ngo bo stong || 'dir ni 'di dag dngos med dngos med min || 'di dag thams cad rang bzhin ma mchis stong ||. Quoted in *SDhNS*, D3889, 86a7-b1 (= Moriyama 1985: 73, cf. 42 n. 103), *Madhyamakāloka*, D3887, 222a6-7.

<sup>10</sup> *Tattvasārasaṃgraha*, D3711, 80b1-4.

<sup>11</sup> *Samādhirāja*, IX.37. Quoted in *SDhNS*, D3889, 86b1-2 (Moriyama 1985: 73, cf. 42 n. 104) and *Tattvasārasaṃgraha*, D3711, 81a3-4. See Ichigo 2011: 20 n. 100 and 67 n. 271.

<sup>12</sup> *Āryabuddhasaṃgīti*, D228, 222b3-4 (cf. T vol. 17, 768c5-6: 汝發道意爲幾何乎。如是所悟非問之理。所以者何。無所生者不可令生)。Quoted in *SDhNS*, D3889, 86b2 (= Moriyama 1985: 73) and *Bhāvanākrama* I (ed. Tucci), 199.14-16. See Ichigo 2011: 21 n. 104.

<sup>13</sup> cakāra-] em., akāra- Ms. Cf. *Nayatrayapradīpa*-Tib (tsa'i sgo) and *Āryabuddhasaṃgīti*, D228, 202a2 (tsa'i sgo).

<sup>14</sup> svabhāvamukhāḥ] Ms (≈ *SDhNS*, D3889). Cf. \*svakāramukhāḥ (sva'i sgo, 己門 *Āryabuddhasaṃgīti*, D228, 202b4, T vol. 17, 761b16).

<sup>15</sup> *Āryabuddhasaṃgīti*, D228, 202a2 (tsa'i sgo ni chos thams cad 'chi 'pho dang skye ba dang bral ba'o), 202b4 (sva'i sgo ni chos thams cad rang bzhin stong pa nyid dang skad stong pa nyid kyi phyir ro): T vol. 17, 761a17 (其行門者一切諸法無放無捨不沒不生), 761b16 (其已門者諸法皆由因空而生恐懼緣生衆苦)。Quoted in *SDhNS*, D3889, 86b2-3 (= Moriyama 1985: 73-74) and *Bhāvanākrama* I (ed.

iti ||<sup>17</sup> *pitāputrasamāgame* coktam—

sarva ete dharmās tryadhvasamatayā<sup>16</sup> samāḥ | atīte 'dhvani sarvadharmāḥ  
svabhāvavi<sub>(4r5)</sub>rahitāḥ | anāgate pratyutpanne 'dhvani sarvadharmāḥ  
svabhāvaśūnyāḥ ||<sup>17</sup>

iti<sup>18</sup> || punas tatraiva spaṣṭīkṛtam—

sarvadharmāḥ svabhāvaśūnyāḥ | yaś ca dharmo 'svabhāvaḥ<sub>(4r6)</sub> sa nātīto  
nānāgato na pratyutpannaḥ | tat kasya hetoḥ | asattvāt svabhāvasya nātīta iti  
prajñāpanīyo nānāgato na pratyutpanna iti prajñāpanīyaḥ ||<sup>19</sup>

iti || tathā *satyadvayāvātāre*<sub>(4v1)</sub> gaditam—

katamaḥ punar mañjuśrīḥ saṃyakprayogaḥ | mañjuśrīr āha | yatsamā  
devaputra paramārthas<sup>20</sup> tathatā dharmadhātur atyantājātiś ca tatsāmāni  
pañcānantaryāṇi |

iti vistareṇa sāmkle<sub>(4v2)</sub>śīkavaiyavadānikānām sarvadharmāṇām samatām  
uktvāha—

Tucci), 199.16-18. See Ichigo 2011 : 22 n. 105.

<sup>16</sup> tryadhva-] em., tryadhve Ms.

<sup>17</sup> *Pitāputrasamāgama*, D60, 162b6-7 ; T vol. 11, 975b12-14 ; T vol. 11, 431c19-22. Quoted in *SDhNS*, D3889, 86b3-4 (= Moriyama 1985 : 74) and *Bhāvanākrama* I (ed. Tucci), 200.7-9. See Ichigo 2011 : 23 n. 109.

<sup>18</sup> iti] em., vṛtti Ms.

<sup>19</sup> *Pitāputrasamāgama*, D60, 163a4-5 ; T vol. 11, 975b22-24 ; T vol. 11, 432a5-7. Quoted in *SDhNS*, D3889, 86b4-5 (= Moriyama 1985 : 74).

<sup>20</sup> paramārthas] em., paramārtha Ms.

katamayā punar mañjuśrīḥ samatayā yāvat paramārthato yatsamaṃ  
vyavadānaṃ tatsamāḥ sarvadharmāḥ | mañjuśrīr āha | paramā<sub>(4v3)</sub> rthataḥ  
sarvadharmā anutpādasamatayā paramārthataḥ sarvadharmā  
atyantājāṭisamatayā parmārthataḥ sarvadharmā abhāvasamatayā devaputra  
samāḥ sarvadharmāḥ ||<sub>(4v4)</sub>

iti vistarah<sup>21</sup> ||<sup>←22</sup> *sarvabuddhaviṣayaññānālokālankāre* 'py uktam—

anutpādadharmāḥ satataṃ tathāgatāḥ sarve ca dharmāḥ sugatena sādṛśāḥ |  
nimittagrāhe<sub>(4v5)</sub> ṇa tu bālabuddhayo hy asatsu dharmeṣu caranti loke ||<sup>23</sup>

iti || *bhagavyāṃ prajñāpāramitāyāṃ* coktam—

rūpaṃ subhūte svabhāvena śūnyam yāvad vijñānam<sup>24</sup> lakṣaṇaśūnyatām  
upādāya ||

iti ||<sup>25</sup> <sub>(4v6)</sub> *ratnakaraṇḍake* 'py uktam—

tat kiṃ mañjuśrīr buddhadharmā apy adharmāḥ | āha | na bhadantasubhūte  
buddhadharmāṇāṃ kācid bhūtā niṣpattiḥ | yā cāniṣpattir nāsau dharmo  
nādharmā itī va<sub>(5r1)</sub> ktavyā<sup>26</sup> | tasmād bhagavān evam āha sarvadharmā

<sup>21</sup> *Satyadvayāvātāra*, D179, 248a6-249a1. Quoted in *SDhNS*, D3889, 86b5-87a1 (= Moriyama 1985 : 74-75, cf. 44-45) and *Madhyamakāloka*, D3887, 161b5-7 (cf. *Bhāvanākrama* I, 199.19-200.1, *Prasannapadā* [ed. de la Valle Poussin] pp. 374.5–375.6). See Ichigo 2011 : 22 n. 106.

<sup>22</sup> Quoted in *Tattvasārasaṃgraha*, D3711, 81b4-81a3.

<sup>23</sup> *Jñānālokālankāra*, Skt. § 10, p. 37 ; T vol. 12, 242b16-17 ; T vol. 12, 257a4-5. Quoted in *SDhNS*, D3889, 87a1-2 (= Moriyama 1985 : 74-75, cf. 45 n. 108) and *Tattvasārasaṃgraha*, D3711, 81a5-6.

<sup>24</sup> vijñānam] em., vijñāna Ms.

<sup>25</sup> Quoted in *SDhNS*, D3889, 87a2-3 (= Moriyama 1985 : 75, cf. 44 n. 109), *Bhāvanākrama* I, 200.1-4, and *Tattvasārasaṃgraha*, D3711, 81a7-b1. See Ichigo 2011 : 22 n. 107.

<sup>26</sup> vaktavyā] em., vaktavyas Ms.

adharmāḥ ||<sup>27</sup>

iti || → yad apy ucyate sarvam eva parikalpitaṃ svabhāvam abhisandhāyoktam iti tat  
satyam eva | parikalpitas tu svabhāvo vaktā<sub>(5r2)</sub> vyaḥ | pramāṇabādhito 'pi bālais  
tattvato grhīta iti cet, evaṃ tarhi janmāder eva parikalpitatvāt pramāṇabādhitatayāpi  
siddham anutpādas tattvam iti |<sup>28</sup> sphuṭīkṛtaṃ caita<sub>(5r3)</sub> d bhagavatā  
dharmasāṅgītau—

utpādanirodhābhiniṣṭaḥ kulaputra<sup>29</sup> lokasamniveśaḥ | tatra tathāgato  
mahākāruṇiko lokasyotrāsapadaparihārā<sub>(5r4)</sub> rtham<sup>30</sup> vyavaharann<sup>31</sup> uktvān  
utpadyante<sup>32</sup> nirudhyante ceti | na cātra kasyacid dharmasyotpādaḥ ||<sup>33</sup>

iti || tasmāt sthītam etad anutpādaśūnyatādīpadopadiṣṭam advayam eva tattva<sub>(5r5)</sub> m iti  
|| ←<sup>34</sup>

（律などに不二智が説かれなかった理由）（Skt. 5r5-v2, Tib. 10r5-7）

→ yad apy uktam vinayādaḥ kim ity advaitam nopadiṣṭam iti tatroktam  
evālpavīryatvād iti | te hi svārthamātrodyatāḥ satyopadeśenaiva kṛtārthāḥ pra<sub>(5r6)</sub>-  
pātam iva ca sarvadharmairātmyasamādhim manyanta iti nādvaitopadeśaḥ | na hi

<sup>27</sup> *Ratnakaraṇḍaka*, D117, 252a5-7; T vol. 14, 453c9-12; T vol. 14, 467c6-9. Quoted in *SDhNS*, D3889, 87a3-4 (= Moriyama 1985: 75, cf. 46 n. 110). Cf. *Tattvasārasaṅgraha*, D3711, 81b1-3.

<sup>28</sup> Cf. *SDhNS*, D3889, 87a4-b1 (gal te 'di thams cad ... kun brtags pa'i bdag nyid): *Vajracchedikāṭīkā*, D3817, 61b4.

<sup>29</sup> kulaputra] em., kulaputrā Ms.

<sup>30</sup> lokasyotrāsa-] em., lokosyotrāsa- Ms.

<sup>31</sup> vyavaharann] em., vyavahārann Ms.

<sup>32</sup> utpadyante] em., utpādyante Ms.

<sup>33</sup> *Āryadharmasāṅgīti*, D238, 43a2-3, T vol. 17, 627a17-20. Quoted in *SDhNS*, D3889, 88a1-2 (= Moriyama 1985: 77, cf. 53 n. 122), *Bhāvanākrama* I (ed. Tucci), 199.10-14, and *Madhyamakāloka* D3887, 153b4-5, etc. See Ichigo 2011: 21 n. 103.

<sup>34</sup> *Tattvasārasaṅgraha*, D3711, 81b3-6.

sarvaṃ sarveṣāṃ upadiśanti daiśīkāḥ | prayojanaparavāt tadupadeśasya | bodhisattvā-  
(sv1) nām tu gambhīrodārāśayatayā sarvākāropakāritvāt sarvaṃ upayujyata iti  
caturāryasatyam apy upadiśyate || ←<sup>35</sup>

[大乘の不二智は方便ではない]

(声聞説—不二智は方便に過ぎない) (Skt. 5v2-3, Tib. 10r7-v2)

【声聞】 athaivaṃ ucyate—duḥkhādikam eva tattvaṃ taddarśanaṃ ca vratadhuta-  
guṇādi<sub>(sv2)</sub> prāpyatayā balavadyatnasādhyam | idaṃ punar advayajñānam atattvaṃ api  
tattvaṃ ādiṣṭam | tattvāvātārārthaṃ sarvasattvānām yatheṣṭaṃ bhāvayatām iti kim iti  
na vyākhyāyate | ko<sub>(sv3)</sub> 'dvayajñāne pakṣapāta iti |

(大乘説—不二智は方便ではない)

(第四偈：仏説による裏付け) (Skt. 5v3-6r2, Tib. 10v2-11r1)

【大乘】 atrocyate—

**mahāyāne svayaṃ śāstrā tathoktam iti tat tathā |  
pratīyus<sup>36</sup> tatpratīpaṃ tu kathaṃ vākyam vinā muneh<sup>37</sup> || (v. 4)**

nāyaṃ svakalpanājālpa eva | kiṃ ta<sub>(sv4)</sub> rhi śāstraivoktaṃ *laṅkāvatārasūtre*—

samādhimadamattās te dhātau tiṣṭhanty anāsrave ||<sup>38</sup>

iti || punaś cātraivoktam—

eṣā mahāmate śrāvakayānābhisamayagotrasyānīrvā<sub>(sv5)</sub> ṇe nirvāṇabuddhiḥ,  
atra mahāmate kudrṣṭivyāvṛttyarthaṃ yogaḥ karaṇīyah ||<sup>39</sup>

<sup>35</sup> *Tattvasārasaṃgraha*, D3711, 81b6-82a2.

<sup>36</sup> pratīyus] em., pratīyas Ms.

<sup>37</sup> muneh] em., mune Ms.

<sup>38</sup> *Laṅkāvatāra*, 2,208cd. Quoted in *Madhyamakāloka*, D3887, 240b6.

<sup>39</sup> *Laṅkāvatāra* (ed. Nanjio), p. 64.1-3 : eṣā mahāmate śrāvakayānābhisamayagotrakasyānīryānīry-

iti || ata evānyena mārgeṇa mokṣābhāvād ekam eva yānam uktaṃ bhagavatā—

tatra tatra ca bhagavatā bodhisattvā<sub>(5v6)</sub> nāṃ śrāvakaṣaṃ-  
vāsālāpaśikṣādipratīṣedha ādiṣṭaḥ ||<sup>40</sup>

iti || vyaṃ api tathā pratipannāḥ | na caivaṃ kvacit pravacane 'dvayañānam eva satya-  
jñānaprāptyupāyatvenopadiṣṭam iti katham vipa<sub>(6r1)</sub> rītatvaṃ pratipadyāmahe |

ekatvānekatvānupapatteś ca niḥsvabhāvatā nyāyabalād eva vṛddhair api  
pradarśitā | bhagavatāpy uktaṃ *laṅkāvatāre*—

yathaiva darpaṇe rūpaṃ ekatvānyatvavarjitaṃ<sup>41</sup> |  
drīśya<sub>(6r2)</sub> te na ca tatrāsti tathā bhāveṣu bhāvatā ||<sup>42</sup>

iti || punaś cuktam—

buddhyā vivecyamānānāṃ svabhāvo nāvadhāryate |  
ato nirabhilāpyās te niḥsvabhāvās ca deśitāḥ ||<sup>43</sup>

iti ||

---

āṇabuddhiḥ | atra te mahāmate kudrīṣṭivāvṛttyartham yogaḥ karaṇīyaḥ ||. This quote and words  
“ata evānyena mārgeṇa ... bhagavatā” after the quotation are found in *Bhāvanākrama* I (ed. Tucci),  
216.24–217.1 and *Madhyamakāloka* D3887, 243a3–5.

<sup>40</sup> Source yet to be identified.

<sup>41</sup> ekatvānyatva-] em., ekatvānadvā- Ms.

<sup>42</sup> *Laṅkāvatāra*, 10.709 (yathā hi darpaṇe rūpaṃ ekatvānyatvavarjitaṃ | drīśyate na ca tan nāsti tathā  
cotpādalakṣaṇam ||). Quoted in *Bhāvanākrama* I (ed. Tucci), 204.4-5 and *Madhyamakāloka*,  
D3887, 226a6-7.

<sup>43</sup> *Laṅkāvatāra*, 2.175 (c : tasmād anabhilāpyās te), 10.167 (c : yasmād tadanabhilāpyās te). Quoted  
in *Bhāvanākrama* I (ed. Tucci), 204.8-9.

（第五偈：プラマーナによる裏付け）（Skt. 6r2–4, Tib. 11r1–2）

**yuktyāgamābhyāṃ yat siddhaṃ ta<sub>(6r3)</sub> t tyaktvānāgamaṃ<sup>44</sup> katham |  
tattvam anyad grahīṣyanti vinā mānaṃ manīṣiṇaḥ || (v. 5)**

yathā cādvaitam evānutpādaniḥsvabhāvatāsūnyatādipadair ucyate, na  
caikānekatvādinā pramīya<sub>(6r4)</sub> te tathā punaḥ paramārthapradīpa eva nirṇītam iti  
tatraivāvadhārayitavyam | tasmāt sthitam etad advaitam evaikam tattvam iti ||

（苦行や離欲は智の獲得にとって無益である）（Skt. 6r4–v1, Tib. 11r3–6）

yat punar uktaṃ dhutagaṇḍīprāpyaṃ satyajñā<sub>(6r5)</sub> nam advayajñānaṃ tu sarvasattvair  
yatheṣṭaṃ bhāvyaṭa iti mahāyānanindāvacanaṃ tad ajñānaṃ eva kevalam  
udbhāvayitum na svamataṃ samarthayitum | na hi yatraiva<sup>45</sup> saṃtāpopeśas ta<sub>(6r6)</sub>–  
traivāvīparītatā | bāhyakānām apy adhikataṃ tapaḥ pañcāgnisevādīkam asti | na ca  
tatrāvīparītajñānavartāpi | bhagavatāpi tadgotrakāñām saṃsāravaimukhyam  
upādeyam iti tān pra<sub>(6v1)</sub>ti dhutādīkam upadiṣṭaṃ——

śīle<sup>46</sup> pratiṣṭhāya budhaś cittaṃ prajñāṃ ca bhāvayet | (cf. *Udānavarga*  
6.8ab)

ityādinā ||

[菩薩の欲望は大悲である]（Skt. 6v1–3, Tib. 11r6–12r5）

【声聞】 bodhisattvānāṃ tu vairāgyaṃ na<sup>47</sup> śreyaḥpadaprāptidvāraṃ mahākāruṇika-  
tvāt | ayam ca teṣāṃ prakṛtyai<sub>(6v2)</sub> va jagati snehaḥ | yad ekasyāpy asubhīto duḥkhaṃ  
samīkṣya na kiñcid atyājyaṃ manyante | ekaviṣayo 'pi ca snehaḥ saṃsārasthītetuḥ |  
kiṃ punar yasya sakalajaga<sub>(6v3)</sub> dviṣayaḥ snehaḥ sa<sup>48</sup> saṃsāravimukhaḥ syāt |

<sup>44</sup> -āgamaṃ-] em., āsamaṃ Ms.

<sup>45</sup> yatraiva] conj., tatraiva Ms.

<sup>46</sup> śīle] em., śīla Ms.

<sup>47</sup> na] conj., om. Ms. Cf. Tib. sgo ma yin te.

<sup>48</sup> sa] conj., om. Ms.

（第六偈：菩薩の喜捨と衆生への愛着）（Skt. 6v3–6, Tib. 11r7–v3）

【大乘】 āha ca——

**prāṇān sutān atha mahīm<sup>49</sup> pramadā dhanāni  
sattvottamās tribhuvanoddhṛtibaddhakakṣāḥ<sup>50</sup> |  
ye samtyajanti tṛ<sub>(6v4)</sub>ṇavat kṛpaṇasya hetoḥ  
ke 'nye tataḥ kṣītitala 'dhikarāgabhājaḥ || (v. 6)**

atha te tribhavopakāropāyapraṇā na svārthamātrārthina iti bhagavān na teṣāḥ<sup>51</sup>  
vairāgyamārgam a<sub>(6v5)</sub>nujñātavān ||

nanv evaṃ sati savāsanāśeṣadoṣāpagamaviśuddham bauddham jñānam  
anantasampadām padam apy amī bodhisattvāḥ katham avāpsyanti, rāgādīnām nirava-  
<sub>(6v6)</sub>dyaguṇānāśrayatvāt ||

（第七偈：菩薩の貪は浄化されている）（Skt. 6v6–7v2, Tib. 11v3–12r5）

ucyate——

**yathā mārgajñatāsuddho rāgas teṣāḥ tridhātuke |  
tathottamapadaprāpter<sup>52</sup> upāyaḥ so 'pi dhīmatām || (v. 7)**

pāramitācārī<sub>(7r1)</sub> hi bodhisattvo na gauṇeṣu vratadhutaguṇādiṣv āhitāsthaḥ pravartate  
| ekam eva hi tasya vratavaram manasi samniviṣṭam——yad uta mahākaruṇā | tac ca  
mahāvratam cara<sub>(7r2)</sub>n bodhisattvo na kriyāsu kṛtaniyamaḥ | yathā yathā tasya  
parārthasampatsambhārabhāvas tathā tathā kriyāḥ pravartante | na hi bodhisattvāḥ  
samraktām striyam apāyagā<sub>(7r3)</sub> minīm upekṣya prātimokṣavratādikam apekṣante<sup>53</sup> |  
idam eva ca teṣāḥ brahmacaryam yānuttaram padam avāptum caryā | tasmāt te

<sup>49</sup> mahīm] em., mahī Ms.

<sup>50</sup> tribhuvanoddhṛti-] em., tribhavanoddhṛta- Ms. Cf. Tib. sa gsum.

<sup>51</sup> bhagavān na teṣāḥ] conj., bhagavatām Ms. Cf. Tib. rjes su gngang ba ma yin no.

<sup>52</sup> tathottama-] em., tathoma- Ms.

<sup>53</sup> apekṣante] em., apekṣyante Ms.

'viparītaṃ mārgam upa<sub>(7r4)</sub>diśanto garhitakriyeṣu śvagovratādiṣu pravartante | sarvās ca durgatīr hamsasumukha<sup>54</sup> iva mānaśaṃ saro 'vataranti | kiṃ bahunā tathā tathā te sakalasattvapari<sub>(7r5)</sub>trāṇabhūtaṃ<sup>55</sup> mahākaruṇāvratam caranti, yena kramāt sakalāma-lapunyañānasambhārāpyāyitaṃ samantabhadraṃ sakṛdakhilajagadupakāraḥsamam anuttaram saugataṃ api padaṃ paropakāro<sub>(7r6)</sub> pakaraṇam evādhigacchanti | na hi teṣāṃ buddhe 'py ātmopakārābhisandhānapūrvikā pravṛttiḥ | atra ca tathā<sup>56</sup> nidarśanam, dharmodgatabhaṭṭārako yathā na bodhisattvānāṃ rāgavaimukhyaṃ ratno-<sub>(7v1)</sub>lkābhaṭṭārikā ca yathā na niyatapravṛttayo bodhisattvāḥ | iyaṃ mārgajñatā mahāsattvānāṃ yad rāgādivaimukhyam api na bhāvayanti anuttaram ca padam āśādayantīti rāgādaya evopaka<sub>(7v2)</sub>raṇam abhisambodher iti ||

（離欲に固執することへの批判）（Skt. 7v2–3, Tib. 12r5–7）

【声聞】 aprahīṅakleśasya katham abhisambodhir iti cet |

【大乘】 nanu ke te kleśāḥ kiṃ ca prahāṇam iti na vidmaḥ | na hi kleśā nāma tāttvikāḥ, tatprahāṇam vā, ādyanu<sub>(7v3)</sub>tpannatvāt sarvadharmāṇāṃ<sup>57</sup> | anena tu krameṇa kim aśeśasampatpadaprāptir bhavati na veti cintanīyam | kiṃ ca yady aprahīṅarāgasyāpīyaṃ samantabhadratā syāt, kiṃ tatprahāṇena ||

（顛倒した貪と顛倒なき貪）（Skt. 7v3–6, Tib. 12r7–v2）

a<sub>(7v4)</sub>pi cātra bhavān upadiṣṭam api rāgaprahāṇam kiṃ nāvagacchati | tathā hy ātmābhiniवेशapūrvakāḥ svaparatayā<sup>58</sup> vibhakteṣv eva viṣayeṣu saktiyādayo rāgādayaḥ | ye punar ni<sub>(7v5)</sub>rmūlitātmagrāhāḥ svaparāvibhāginas<sup>59</sup> teṣāṃ sarvadharmasvabhāva-samatāśayānāṃ parinirvṛtānāṃ eva loke viharatāṃ kamanīyapratikūlavīṣayāropābhā-vāt ka<sub>(7v6)</sub>tham viparyāsasamudbhavā rāgādayo bhaviṣyanti ||

<sup>54</sup> -sumukha] conj., -mukhā Ms. (Cf. Hamsajātaka in Āryaśāura's *Jātakamālā*, no. 22.)

<sup>55</sup> sakala-] em., sakalaṃ Ms.

<sup>56</sup> tathā] conj., yathā Ms.

<sup>57</sup> -dharmāṇāṃ] em., -dharmāṇāṇāṃ Ms.

<sup>58</sup> svaparatayā] em., svaparayā Ms.

<sup>59</sup> svaparā-] em., svapara- Ms.

[傍論：顛倒した貪の放棄と顛倒なき貪としての大悲]  
 (第八偈：慈悲の潜在慣性力) (Skt. 7v6–8r1, Tib. 12v2–3)  
 āha ca——

**ye nirdagdhasamastadoṣajanānisatkāyadr̥ṣṭindhanā**  
**nirmūlasvapaparabhedaviṣayās teṣāṃ na<sup>60</sup> doṣodayaḥ<sup>61</sup> |**  
**nirdoṣā api<sup>(8r1)</sup> vidyayeva kṛpayā māyānarāḥ<sup>62</sup> karmasu**  
**preyante sudhiyaḥ purāprañidhitaś cakraḥhramāvegavat || (v. 8)<sup>63</sup>**

(声聞——ろくろもいつかは止まる) (Skt. 8r1–2, Tib. 12v3–4)

【声聞】 evaṃ tarhi prañidhikṛpākṣepaparikṣayād anantasampadaḥ samantabhadratā-  
 yāḥ kṣa<sup>(8r2)</sup> ye nātyantikī viśuddhiḥ syāt | cakraḥhramaṇadr̥ṣṭāntenaiva | yathā  
 kulālāhitasamśkāraparikṣayāc cakraḥhramaṇavinivṛttis tadvad asyā api syāt |

(大乘——譬喩はあくまで譬喩にすぎない) (Skt. 8r2–5, Tib. 12v4–7)

【大乘】 kiṃ vai sarva eva dr̥ṣṭāntadha<sup>(8r3)</sup> rmā dārṣṭāntikam anuyānti, tayoḥ sāmyaṃ  
 na sarvātmanā | na hi sakalanakharadamṣṭrādivyāghrāvayavayogāt puruṣavyāghra ity  
 ucyate, kiṃ tarhi kenacid eva śauryā<sup>(8r4)</sup> dinā | atrāpi yathā kulālaprayatnoparame 'pi  
 cakrabhramaṇaṃ<sup>64</sup> tathānālāmbanāvasthāyām api kṛpāyām sālambanakriyākā-  
 ryāniṣpattir ity etāvad dr̥ṣṭāntenocya<sup>(8r5)</sup> te || yad uktam——

sāṃnidhyamātratas tasya puṃsaś cintāmaṇer iva |  
 niścaranti yathākāmaṃ kuḍyādibhyo 'pi deśanāḥ ||<sup>65</sup>

<sup>60</sup> na] em., ca Ms.

<sup>61</sup> doṣodayaḥ ] em. (Tib. nyes pa bskyed ; Dr. Horiuchi's suggestion), doṣādayaḥ Ms.

<sup>62</sup> -narāḥ] em., -narakā Ms.

<sup>63</sup> Quoted by Bhavyakīrti (D1793, 43b2-3), Nāgabodhi (D1840, 41a3-4), and Lakṣmī (D1842, 192a1-2).

<sup>64</sup> cakra-] em., śakra- Ms. Cf. Tib. rdza mkhan gyi 'bad pa med par yang 'khor lo 'khor ba.

<sup>65</sup> *Ślokaṅvṛttika*, codanā, v. 138. Cf. Kataoka 2003 : 20-23. Quoted in *Tattvasaṃgrahaḥapañjikā* (ed. Krishnamacharya), p. 442 (Cf. *Tattvasaṃgraha* v. 3240), Haribhadra, *Abhisamayālaṃkāḥlōkā*

iti ||

（慈悲の永続性）（Skt. 8r5–6, Tib. 12v7–13r7）

śāsvatī punaḥ kutaḥ samantabhadrateti atra hetuviśeṣo vācyaḥ | sa <sub>(8r6)</sub> ucyate——

（第九偈：無顛倒なる潜在慣性力）（Skt. 8r6–v5, Tib. 13r1–7）

**jaḍājaḍāśrayatvena saṃskāre 'sti viśiṣṭatā |**  
**viparyāsāviparyāsaviśayatvāt kṣayākṣayau || (v. 9)**

kāyiko hi nṛtyādisaṃskāro nābhyāso parame cirānuvartī<sup>66</sup> <sub>(8v1)</sub> dṛṣṭaḥ | mānasas tu tadarthābodobde viśayādhikakālānuyāyīti<sup>67</sup> vyavasthitas<sup>68</sup> tāvaj jaḍājaḍāśrayayoḥ saṃskārayor viśeṣaḥ ||

【声聞】 kiṃ tv ajaḍāśrayo<sup>69</sup> 'pi saṃskāro nātyantam avasthāyīty atyantā<sub>(8v2)</sub> nuparamaṃ pratikṣipāmaḥ |

【大乘】 so<sup>70</sup> 'pi na pratikṣeptavyo 'viparyastaviśayatvāt | tāvad eva hi rajjvāṃ sarpa-buddhir yāvan na viparyāsāpagamaḥ | tadapagame tu tattvarajjuviśayaḥ saṃskāraḥ sthira itī <sub>(8v3)</sub> na punar viparyāsavṛtīḥ saṃbhavati |

【声聞】 vismaraṇe bhavaty eveti cet |

【大乘】 vismaraṇam eva tāvat katham |

【声聞】 abhyāsavicchedāc cet |

【大乘】 yuktam uktam——abhyāsavicchedād vismaraṇam, vismaraṇe <sub>(8v4)</sub> ca viparyāsaprapavṛttir iti | yasya tu mahāsattvasyā prañidhicittāt tattvapratīṣṭhasya samastāmbanamahākṛpābhyāsasrotaso na vicchedaḥ, tasya vismaraṇaviparyāsāv api na <sub>(8v5)</sub> syātām iti siddha ātyantikas tattvānugataparopakāravāsanānuparama iti

(ed. Wogihara) p. 992.18–19.

<sup>66</sup> cirānuvartī] conj., cirānubandhī (?) Ms.

<sup>67</sup> viśayādhikakālānuyāyīti] conj., viśayāvikakālānuyāyīn Ms.

<sup>68</sup> vyavasthitas] conj., vyavasthi Ms.

<sup>69</sup> tv ajaḍāśrayo] em., tu jaḍāśrayo Ms.

<sup>70</sup> so] conj., yo Ms.

sarvārthasampadas sarvajñasyopapattir ity alam atiprasaṅgena ||

（第七偈のまとめ）（Skt. 8v5, Tib. 13r7–v1）

tasmād idam āścaryam āśca<sup>(8v6)</sup> riyasattvānām caritaṃ mārgajñatāparisuddhaṃ yat sakalasaṃsārāsaktacetaso 'py<sup>71</sup> uttīrṇāḥ saṃsārasāgarāj jagad uttārayantīty acintyam upāyakaūśalam ||

### 和訳

（真実が本不生であることへの経証）<sup>72</sup>

他方、[真実が] 本不生であることは、無数の經典の中で世尊が説き示した。それについて『象腋経』では[次のように]説かれた。

あるものにとって生起が存する場合、[そのものにとって]存在 (bhāva) は全く得られない。[それにも関わらず] 凡夫は自性なき諸存在に関して生起があると言い張る<sup>73</sup>。

と。同様に『ラトナーカラ [経]』に[次のように]示された。

あるものに自性が全く存在しない場合、その自性なきものがどうして他のものを条件とするだろうか。自性なきものがどうして他のものを生み出すだろうか。このことについての理由が、善逝によって説示さ

<sup>71</sup> 'py] em., 'bhy Ms. Cf. Tib. kyang.

<sup>72</sup> 下記の一連の經典引用はカマラシーラ著『一切諸法無自性論証』に出る經典引用とほぼ一致する。順序の前後などの相違もあるが、そこからの孫引きと考えられる。磯田 1979: 98、Moriyama 1985 を参照。詳細は梵文テキストの注におよび引用元の經典における所在を網羅した Moriyama 1985、Ichigo 2011 を参照。

<sup>73</sup> *Hastikakṣyasūtra*, D207, 105a6; T vol. 17, 785b8-9; T vol. 17, 779b21-22. 引用: *SDhNS*, D3889, 86a7 (=Moriyama 1985: 73, cf. 41 n. 101), *Bhāvanākrama* I (ed. Tucci), 200.4-6. See Ichigo 2011: 23 n. 108.

れた<sup>74</sup>。

と。そして大部の『聖海龍王所問 [経]』<sup>75</sup>においても [次のように] 説かれた。

[一切諸法は]、前際において空であり、後際において空であり、生・滅・住の状態において空である。そして存在物はなく、非存在もまたない。なぜなら一切諸法は自性として空だからである<sup>76</sup>。

と。また『聖三昧王 [経]』に [次のように] 説かれた。

たとえば、芯 (sāra) を求める人が、若い芭蕉の幹 (バナナの茎) を、観察したとしても、中にも外にも芯は存在しないように、一切諸法は同様なものとして喩えられると、あなたがたは知っている<sup>77</sup>。

と。『ブツダサンギーティ [経]』にも説かれた。

「如理なる (yonisāḥ) 問い」とは何か。そして「非如理なる [問い]」とは何か。答える。「如理」(yonī) とは不生のことであり、それについての問いが「如理なる問い」である<sup>78</sup>。

<sup>74</sup> *Ratnākaraśūtra*, D124, 285b3-4. 引用: *SDhNS*, D3889, 86a6-7 (=Moriyama 1985: 73, cf. 42 n. 102), *Prasannapadā* (ed. MacDonald), 300.8-301.2. 「他のものを条件とするだろうか」(parapratyayaḥ) は、「他のものにとって条件となるだろうか」とも訳しうる。

<sup>75</sup> 「大部の」(mahat) の語を付しているのは、*Sāgararājaparipṛcchā* には同名テキストの下部のバージョンが 2 本 (D154, D155) 存在するため、本書 (D153) をそれらから区別するためであると理解される。

<sup>76</sup> *Āryasāgaranāgarājaparipṛcchā*, D153, 192a2-3. 引用: *SDhNS*, D3889, 86a7-b1 (=Moriyama 1985: 73, cf. 42 n. 103), *Madhyamakāloka*, D3887, 222a6-7.

<sup>77</sup> *Samādhirāja*, IX.37. 引用: *SDhNS*, D3889, 86b1-2 (Moriyama 1985: 73, cf. 42 n. 104), *Tattvasārasaṃgraha*, D3711, 81a3-4.

<sup>78</sup> *Āryabuddhasaṃgīti*, D228, 222b3-4 (cf. T, vol. 17, 768c5-6). 引用: *SDhNS*, D3889, 86b2 (=Moriyama 1985: 73), *Bhāvanākrama* I (ed. Tucci), 199.14-16. Ichogo 2011: 21 n. 104 参照。

と。また同書に説かれた。

一切諸法は *ca* を字門とし、死没 (*cyuti*) と再生とを離れている。一切諸法は *svabhāva* を門とする<sup>79</sup>。自性 (*svabhāva*) として空であるゆえに<sup>80</sup>。

と。また『父子集合 [経]』に説かれた。

これらの一切法は、三つの時において平等であるという点で、「平等」なのである。過去世において一切諸法は自性を欠き、未来世と現在世において一切諸法は自性として空である<sup>81</sup>。

と。さらに同書において [次のように] 明かされた。

一切諸法は自性として空である。そして自性なる法、それは過去にもないし、未来にもないし、現在にもない。それはなぜか。自性が存在しないから、過去はないと知られるべきであり、未来はなく、現在はないと知られるべきである<sup>82</sup>。

と。同様に『入二諦 [経]』の中に語られた。

<sup>79</sup> 引用元である *Āryabuddhasaṃgīti* (Moriyama 1985: 73-74) には、「*sva* を字門とする」とある。しかし本書はカマラシーラの『一切諸法無自性論証』(D3889) から同教言を孫引きしている考えられるため、後者の読みと一致する「*svabhāva* を門とする」という表現を採用した。

<sup>80</sup> *Āryabuddhasaṃgīti*, D228, 202a2; T vol. 17, 761a17, 761b16. 引用: *SDhNS*, D3889, 86b2-3 (= Moriyama 1985: 73-74), *Bhāvanākrama* I (ed. Tucci), 199.16-18, Ichigo 2011: 22 n. 105 参照。

<sup>81</sup> *Pitāputrasamāgama*, D60, 162b6-7; T vol. 11, 975b12-14; T vol. 11, 431c19-22. 引用: *SDhNS*, D3889, 86b3-4 (= Moriyama 1985: 74), *Bhāvanākrama* I (ed. Tucci), 200.7-9, Ichigo 2011: 23 n. 109 参照。

<sup>82</sup> *Pitāputrasamāgama*, D60, 163a4-5; T vol. 11, 975b22-24; T vol. 11, 432a5-7. 引用: *SDhNS*, D3889, 86b4-5 (= Moriyama 1985: 74).

[天子は問う。]「また文殊よ。正しい修行とはいかなるものか」。文殊は答える。「天子よ。あるものが勝義、真如、法界、畢竟不生と等しい場合は、そのものは五蓋と等しい」

云々と、雑染と浄化の一切諸法の平等性を説いた後で、[天子は]述べる。

「また文殊よ。どのような平等性ゆえに…中略 (yāvat) …勝義の点で、あるものが浄化と等しい場合、そのものは一切諸法と等しいのか」。文殊は答える。「天子よ。勝義の点で、一切諸法は不生なるものとして等しいゆえに [平等であり]、勝義の点で、一切諸法は畢竟不生なるものとして等しいゆえに [平等であり]、勝義の点で、一切諸法は非在なるものとして等しいゆえに [平等である]」<sup>83</sup>。

云々。『一切諸仏境界智光明莊嚴 [経]』にも [次のように] 説かれた。

如来たちは常に不生なる諸法を有する。そして全ての諸法は善逝と類似している。しかし世間において、特相を把握することによって、凡夫の諸認識は、非存在なる諸法に対しても活動してしまうのである<sup>84</sup>。

と。そして世尊母般若波羅蜜に説かれた。

スプーティよ。色は自性としては空である。乃至、識は相が空であるゆえに<sup>85</sup>。

<sup>83</sup> *Satyadvayāvātāra*, D179, 248a6-249a1. 引用: *SDhNS*, D3889, 86b5-87a1 (= Moriyama 1985: 74-75, cf. 44-45), *Madhyamakāloka*, D3887, 161b5-7 (cf. *Bhāvanākrama I*, 199,19-200).1 Ichigo 2011: 22 n. 106 参照。

<sup>84</sup> *Jñānālokālamkāra*, Skt. § 10, p. 37; T vol. 12, 242b16-17; T vol. 12, 257a4-5. 引用: *SDhNS*, D3889, 87a1-2 (= Moriyama 1985: 74-75, cf. 45 n. 108), *Tattvasārasaṅgraha*, D3711, 81a5-6.

<sup>85</sup> 引 用: *SDhNS*, D3889, 87a2-3 (= Moriyama 1985: 75, cf. 44 n. 109). *Bhāvanākrama I*, 200.1-4, *Tattvasārasaṅgraha*, D3711, 81a7-b1. Ichigo 2011: 22 n. 107 参照。

と。また『ラトナカラングカ [経]』にも説かれた。

「文殊よ。ではどうして仏の諸法もまた非法なのか」。答える。「大徳スプーティよ。仏の諸法にとって本当の生起は何一つない。そして生起しないものは法でも非法でもない』と説かれるべきです。それゆえに世尊は『一切諸法は非法なり』とお説きになったのです」<sup>86</sup>。

と。

また、『一切 [諸法は非法なり]』[という上掲の教言中の表現]は遍計所執性を意図して述べられたのだ、という[論難がある]ならば、まさにその通りである (satyam eva)。しかし、[その場合も]遍計性[とは何であるか]が述べられなければならない。

「プラマーナ（認識基準）によって拒斥されるが、凡夫たちによっては真実として把握される [ものが [遍計性なり]』というならば、そのようなのであるならば、ただ生 (janman) などだけが遍計 (分別) されたものなので、プラマーナによって拒斥される点からしても<sup>87</sup>、[生と反対である] 真実は不生なり、ということが成立するのである<sup>88</sup>。このことは、世尊によって、『ダルマサンギーティ [経]』の中で明らかにされた——

善男子よ。世人の衆は生起と滅に執着している。そこで大悲ある如来は、世人の恐れる状態を取り除くために、言語表現を用いながら語った——「生起しては滅する」と。しかし [本当のところ、] ここにお

<sup>86</sup> *Ratnakaraṅḍaka*, D117, 252a5-7; T vol. 14, 453c9-12; T vol. 14, 467c6-9. 引用: *SDhNS*, D3889, 87a3-4 (=Moriyama 1985: 75, cf. 46 n, 110), *Tattvasārasaṅgraha*, D3711, 81b1-3.

<sup>87</sup> この「も」(api)という表現が意図するところは、教言の中で既に「真実とは不生なり」と説かれたことを確認したが (fol. 3v1: *anutpādaḥ satyam*)、さらにこの文の中では論理の点からもまた、「真実とは不生なり」と言えることを指すと理解した。

<sup>88</sup> 「全て」とは、世俗としての全てを指す場合、ただ生起などだけが遍計されたものであるが、そうではない不生なるものは、遍計されたものではなく、真実である、という意図か。

いて法の生起は何ひとつとしてない<sup>89</sup>。

と。それに基づいて、「不生・空性などのことばで説示されたものが、まさに不二なる真実なり」ということが確立された。

（律などに不二智が説かれなかった理由）

また律などにおいて、一体なぜ不二〔智〕(advaita) が説示されなかったのか、と言われたそのことに対して、まさに述べられたのが、「〔声聞は〕精進少なきゆえ」(alpavīryatvāt) という文言である<sup>90</sup>。というのも、彼ら（声聞たち）は、自利のみを掲げて〔四〕諦の教誡だけによって目的を果たし、そして〔恐ろしい〕断崖 (prapāta) のようなものとして一切諸法の無我についての三昧を〔曲〕解するので、〔声聞に向けての〕不二 (advaita) の教誡は存在しないのである。というのも、教師（仏）たちは誰にでも全てを教え示すわけではないからである。なぜなら、彼ら（声聞たち）の教誡は、〔狭い〕目的ばかりに終始してしまう (prajñāparā) からである。いっぽう、菩薩たちは甚深かつ広大な志を持つゆえに、あらゆるかたちで〔人々に〕役立とうとする者たちであるため、あらゆることを引き受ける。だから四聖諦ですらも説き示すのである<sup>91</sup>。

〔大乘の不二智は方便ではない〕

（声聞説一不二智は方便に過ぎない）

<sup>89</sup> *Āryadharmasāṅgīti*, D238, 43a2-3, T vol. 17, 627a17-20. 引用: *SDhNS*, D3889, 88a1-2 (=Moriyama 1985: 77, cf. 53 n. 122), *Bhāvanākrama* I (ed. Tucci), 199.10-14, and *Madhyamakāloka* D3887, 153b4-5, etc. Ichigo 2011: 21 n. 103 参照。

<sup>90</sup> この文言は前述の「世尊は精進少なき声聞たちが偉大な菩薩行を為し得ないことをご存知になってから」(2v6: bhagavatā hi śrāvakān alpavīryān mahatyām bodhisatvacaryāyām asamarthān avetya) を指す。

<sup>91</sup> 菩薩が「四聖諦ですらも説き示す」ということについては、例えば義浄の『南海寄帰内法伝』の記述によっても裏付けられる。「(大乘も小乗も)通じて四諦を修めているのである。もし菩薩を礼(拜)して大乘経を読(誦)するならば、これを大乘と名づけるのであり、斯の事をしなければ之を小乗と号ぶのである」(宮林・加藤 2004: 17-18、一部割愛した)。無論、例えば『中論』24.40 や、『勝鬘経』などの大乘經典にも四諦は様々な角度から語られる。

【声聞】そこで次のように述べられる——真実は苦など（四諦）だけであり、そしてその体験（darśana）は、誓戒（vrata）や頭陀（dhuta）の徳性などを通じて得られるべきものであるゆえ、強力な努力によって達成される。さらにその不二智は、真実でないにも関わらず真実として報告された [が、それは各自の] 願望に応じて修習する一切の衆生たちを真実へと導き入れるためのもの（方便）である<sup>92</sup>、というように解説されないのはなぜなのか（つまり不二智が方便たる入り口であり、四諦こそが最終到達点である）。不二智に偏執する人（pakṣapāta）は一体誰なのか（菩薩こそ偏執しているはずだ）——と。

（大乘説—不二智は方便ではない）

【大乘】これに対して言う——

（仏説による裏付け）

「大乘において [真実は] 教主自身により、かく語られた」というそのことを、[菩薩たちは] ありのままに理解するだろう。しかし [菩薩たちにとって、] 牟尼の言葉を抜きにして、それとは真逆に [誤認するようなことが] 一体どうしてありうるだろうか。（第四偈）

これは、単に自分の妄想をつぶやいているだけではない。そうではなく、まさに教主によって『入楞伽經』に説かれたのである。

彼ら三昧に<sup>すいごう</sup>酔傲した者たちは、無漏界にとどまる<sup>93</sup>。

と。またさらに同書の中に [次のように] 説かれた。

マハーマティよ。声聞乗において [さとりを] 現観する種性を持つ者には、このような、涅槃でないものを涅槃とする [倒錯した] 知があ

<sup>92</sup> この矢印で括った一節（Skt. 5v2: tattvāvatārārthaṃ sarvasattvānām yatheṣṭaṃ bhāvayatām iti）は、後で大乘側がその趣旨を再説し論駁する（Skt 6r4.5: advayajñānaṃ tu sarvasattvair yatheṣṭaṃ bhāvayata iti）。

<sup>93</sup> *Laṅkāvatāra*, 2.208cd, 引用: *Madhyamakāloka*, D3887, 240b6.

る。マハーマティよ。これに関する悪見を斥けるために、実践（yoga）がなされねばならない<sup>94</sup>。

と。まさにこれゆえに他の道によって解脱はないので「乗はただ一つなり」ということが世尊によって〔次のように〕説かれた——

そして、声聞と共に暮らしたり共に雑談したり共に学んだりなどすることへの禁止は、世尊が菩薩たちに処々で教示なさった<sup>95</sup>。

と。我々もまたその通りに理解している。そしてそのように（声聞側が主張するように）<sup>96</sup>、「不二智こそが〔四〕諦の智を獲得するための方便である」とは、いかなる教言においても示されていない。だから、どうして〔不二智は四諦の方便なりという〕真逆のことが、我々に理解されるだろうか。

そして一と多がありえないことにより、〔諸法が〕無自性であることは、ほかならぬ論理の力によって、賢者たち<sup>97</sup>によっても説示されたではないか<sup>98</sup>。世尊によっても、『入楞伽經』の中に〔次のように〕説かれた。

ちょうど鏡の中における〔映し〕姿は、〔本体との〕同一性と別異性とを離れており、〔その姿は〕見えるが、そこ（鏡の中）に〔本体が〕実在しているわけではない。同じように、諸存在における存在も〔姿は見えるが、そこに本体が実在しているわけではない〕<sup>99</sup>。

<sup>94</sup> *Laṅkāvatāra* (ed. Nanjio), p. 64.1-3. 引用、並びに直後の文言： *Bhāvanākrama* I (ed. Tucci), 216.24-217.1, *Madhyamakāloka*, D3887, 243a3-5.

<sup>95</sup> 典拠未詳。

<sup>96</sup> 上記 fol. 5v2 を参照。

<sup>97</sup> カマラシーラやダルマキールティなどを指すか。

<sup>98</sup> 別の読みの可能性としては *ekatvānekavānupapattés* (→ *-pattis*) *ca niḥsvabhāvatā-nyāyabalād eva vṛddhair api pradarsitā* と読み「そして、〔諸法に〕一と多がありえないことは、ほかならぬ無自性の論理の力によって、賢者たちによっても説示されたではないか」と理解することもできるか。

<sup>99</sup> *Laṅkāvatāra*, 10.709. 引用： *Bhāvanākrama* I (ed. Tucci), 204.4-5, *Madhyamakāloka*, D3887, 226a6-7.

と。さらにまた [次のように] 説かれた。

[諸存在が] 知によって分析されているときに、自性は確定されない。それゆえ、それら（諸存在）は不可言にして無自性であると説示された<sup>100</sup>。

と。

（プラマーナによる裏付け）

**論理と教言によって証明されたことを放棄した後、プラマーナもなしに、教言を欠如する何らかの別なる真実を、賢者（菩薩）たちが把握するようなことが、一体どうしてあり得ようか。（第五偈）**

そしてまさに不二 [智] は、不生・無自性・空性などのことば（教言）によって述べられたが、しかし一多性などによっては量られない (na pramīyate) ということは、そのままに他ならぬ『勝義灯火』 (*Paramārthapradīpa*) の中で確定された<sup>101</sup>。だから [その詳細は] まさに同書の中で確かめられるべきである。それゆえに「不二 [智] (advaita)こそが唯一なる真実である」ということが確立されたのである。

（苦行や離欲は智の獲得にとって無益である）

他方、「[四] 諦の智は頭陀の徳性など [苦行] を通じて得られるべきものであるが、しかし不二智は、一切衆生によって、望みに応じて修習（実現）され

<sup>100</sup> *Laṅkāvatāra*, 2.175 (c: tasmād anabhilāpyās te), 10.167 (c: yasmād tadanabhilāpyās te). *Bhāvanākrama* I (ed. Tucci), 204.8-9 所引。本書のこの『楞伽經』からの二偈はカマラシーラの『修習次第初篇』を引き写した可能性が高い。本書の引用文言は『修習次第初篇』のそれと一致するが『楞伽經』のそれとは異読があり、また、本書所引の二偈は『修習次第初篇』でも全く同じ配列で連記されているからである。

<sup>101</sup> *Paramārthapradīpa* は、同著者による作品のタイトルを示すと暫定的に理解したが、この作品自体の存在は確認されていない。

る」という<sup>102</sup>、大乘に対する非難の言葉は、ただ単に無知をこそ露呈するためのものであり、[声聞]自身の考えを補強しうる[発言]ではない。というのは、或るところに苦行の教えがあるからといって、そこに無顛倒性があるとは限らないからである。異教徒たちにとっても、五火への奉仕（*pañcāgnisevā*、五熱炙身）<sup>103</sup>などの、[頭陀などよりも]さらに強力な苦行が存在するが、そこにおいては無顛倒の智があるという噂すらない。

その（声聞乗の）種性を持つ者たちにとっては輪廻に顔を背けることが、引き受けられるべきこと（*upādeya*）であるゆえ（*iti*）、彼ら（声聞たち）に向けて頭陀などが、世尊によっても教え示された――

賢者は戒に立脚してから心（定）と慧とを修習すべし。

云々と（cf. *Udānavarga* 6.8ab, *Vinayavastuṭīkā*, D4113, 237b7）。

[菩薩の欲望は大悲である]

いっぽう菩薩たちにとって離貪は、最勝（*śreyaḥ*）の境地へと到達するための入り口ではない<sup>104</sup>。なぜなら[菩薩たちは]大悲を持つ者たちだからである。そして彼ら（菩薩たち）には、まさに本性として、世界へと向けられた愛着

<sup>102</sup> 先述の声聞からの論難の一節（Skt. 5v2: *tattvāvatārārtham sarvasattvānām yatheṣṭam bhāvayatām iti*）を指す。

<sup>103</sup> 釈尊が苦行時代になした異教徒の荒行の一つとして列挙される *pañcatapa* または *pañcatapassevā* を指すとみられる。例えば『ラリタヴィスタラ』第17章には、「煙を吸い、火焰を呑み、太陽を凝視して、五火[の苦行]（*pañcatapa*）を修し、片足・腕揚げを持続し、一本足で立つこと[などの方法]によって、苦行を積集する」（訳文は外蘭 2020: 385 による）とあり、苦行の一つとして挙がる。これは四方の火および上方の太陽という「五火」に身をさらす五熱炙身の苦行を意味するという（外蘭 2020: 385 n. 166）。

<sup>104</sup> 梵文写本には *bodhisattvānām tu vairāgyaṃ śreyaḥpadaprāptidvāraṃ* 「いっぽう菩薩たちにとって離貪は、最勝の境地へと到達するための入口である」とある。文脈およびチベット語訳 *ma yin te* により、否定辞 *na* を補った。つまり直前の文で、声聞には離貪が修行の起点として説かれたとあるため、ここではその対として、菩薩にとって離貪は修行の起点にはならない旨が説かれていると理解される。

(sneha) がある。ただひとりの生き物 (asubhrt) の苦すらも見つけ出して「決して捨て置かれてはならない」と〔菩薩たちは〕考える。また、ひとりを対象とする愛着でさえも、〔菩薩たちを〕輪廻内に引き留める原因となる。いわんや全世界を対象とした愛着を持つその彼（菩薩）が、輪廻に顔を背けることがどうしてあろうか。そして以下のように言う。

（菩薩の喜捨と衆生への愛着）

**憐れむべき人 (krpaṇa) のために〔自分自身の〕命や息子たちや土地や妻や財産をまるで雑草のように喜捨し、三領域（全世界）を濟度するために帯を締めた（覚悟を決めた）最も勝れた衆生たち。彼ら以外に、さらに勝れた「貪」を持つ者たちがこの地上にいるだろうか。〔否、いない。〕（第六偈）**

さて彼らは三界のために役立つ方便に身を捧げており、自利ばかりを追い求める者たちではない。だから世尊は彼ら（菩薩たち）に離貪の道〔へと進むこと〕を認めない。

【声聞】たとえそうだととしても、潜在印象を含む全ての過失から離れて浄化されており、かつ無辺の完成にとっての拠り所でもある仏の智に、この菩薩たちが一体どうして到達するだろうか。〔否、到達しまい。〕なぜなら貪などは、過誤なき徳性にとっての拠り所たりえないからである。

【大乘】〔その論難に対して次のように〕言われる――

（菩薩の貪は浄化されている）

**彼ら（菩薩たち）の三界に向けられた「貪」が道智者性によって浄められれば浄められるほど、その分だけ、智者（菩薩）たちのそれ（貪）も最高の境地を得るための方便となる、と<sup>105</sup>。（第七偈）**

というのは、波羅蜜行を實踐する菩薩は、副次的な誓戒や頭陀の徳性などに足

<sup>105</sup> yathā ... tathā という表現は、注釈に従って、yathā yathā ... tathā tathā という意味で理解した。

場を置いて実践する者ではないからである。なぜなら (hi)、彼 (菩薩) には、ただひとつの最高の誓戒、すなわち大悲が、心に固定されているからである。そしてその大誓戒を実践する菩薩は、諸々の行いに対して制約を設けない。彼に利他円満の資糧があればあるほど (yathā yathā)、その分だけ (tathā tathā) 諸々の [利他の] 行いが展開するのである。じつに菩薩たちは、欲深い女性が悪趣に墮するのを放っておいて (見捨てて *upeksya*)、[自分自身の] 別解脱の誓戒などを [優先的に] 考慮することはしない。そしてまさにこの、彼ら (菩薩たち) の「梵行」は、最高の境地 (無上正等覺) を得るための「行」(*caryā*) なのである。それゆえに、彼らは真正 (不顛倒) なる道を教え示すために、[世間では] 嫌悪される行である、犬や牛の誓戒などを [敢えて] 実践するのである。そしてあたかもハンサ鳥 [の将] スムカが<sup>106</sup> マーナサ湖に [入るように]、[菩薩たちは] あらゆる悪趣に向かって入ってゆくのである<sup>107</sup>。ようするに (*kim bahunā*)、まさにそのようにして彼らは全衆生を救済する手段たる、大悲という誓戒を修行するのである。それによって漸次に (*kramāt*) 全ての無垢なる福德と智の資糧に涵養され、普賢にして (*samantabhadra*、あらゆる点ですぐれた)<sup>108</sup>、全世界を同時に利することができる、無上なる善逝の境地でもある、他者を利するために役立つことだけを成し遂げるのである。じつに彼らは、ブッダに対してすらも (*buddhe 'py*)、利己的な意図を前提として行動することはない<sup>109</sup>。そしてこのことについては次のような事例 (典拠) がある。つまりダルモードガタ尊者のように、菩薩たちは貪に背を向けることなく、そしてラトノール

<sup>106</sup>「ハンサ鳥の将スムカ」については、アーリヤシューラの『ジャータカマーラー』第22話を参照。

<sup>107</sup>つまり、菩薩は自ら率先して利他のために地獄などにおいて生まれ変わる (故意受生) ことを意味する。

<sup>108</sup>文法的には *samantabhadram* は *saugatam padam* (ブッダの境地) に掛かると理解した。この「普賢」という語は後にもたびたび登場し、到達目標としてのブッダの境地を示す意味で用いられる。

<sup>109</sup>*buddhe 'py* については *buddhatve 'py* という意味で解釈しうる可能性がある。その場合、この一文は、自ら得るべき仏の境地に関してすらも菩薩は自利を優先させないという意味で理解しうる。

カー尊者<sup>110</sup>のように、菩薩たちは活動に制約をもたない。貪などに背くことも実践させずしかも無上の境地へと赴かせるということ、これが大士（摩訶薩）たちの道智者性である。だから（iti）、貪などこそが、現等覚（さとり）にとって役に立つものなのである。

（離欲に固執することへの批判）

【声聞】 どうして煩惱を捨てていない者に現等覚がありうるだろうか、というなら、

【大乘】 その場合、「その煩惱とは何か、そして〔煩惱の〕放棄とは何か」ということについて我々はまだ知らない（まだあなたがた声聞から聞かされていない）。そもそも「煩惱」というのは、真実として存在するもの（tāttvika）ではない。あるいは、「その放棄」というのも〔真実として存在するものではない〕。なぜなら一切諸法は本不生だからである<sup>111</sup>。しかし、「この次第によって、無欠なる円満の境地に到達するのか、しないのか」ということが考察されねばならない<sup>112</sup>。そもそも、もし貪（煩惱）を放棄していない者にも、この普賢なる境地（samantabhadratā）があるのであれば、それ（貪・煩惱）を放棄することに一体どんな意味があるのか。〔貪の放棄自体に意味がなくなる。〕

（顛倒した貪と顛倒なき貪）

さらに、ここ（大乘）において〔顛倒した〕貪を放棄することが説き示されているのに、あなたはどのようにして理解しないのか。すなわち、自と他に分け隔てられた対象への固執（sakti）を始めとする〔顛倒した〕貪などは、自我への執着（ātmaḥniveśa）を前提としている。いっばうで自我への執着を根こそぎに

<sup>110</sup> ダルモードガタについては例えば『八千頌般若』第30～31章などを参照。ラトノールカーの「活動に制約をもたない」という逸話については未詳である。本書の後の箇所にも再度その名が挙がる（Skt 9v1-2: ratnolkābhataṭṭārikāyāḥ prathamacittotpādikabodhisattvavyavasthāne sphuṭam etat）。

<sup>111</sup> つまり煩惱の存在もその排除も、勝義としては一切空であるので、実体的に存在するわけではないことを述べている。

<sup>112</sup> 離貪を行じることによって到達目標に至ることができるかどうかについてまず考えるべきことを声聞に向けて論していると理解した。

して、自と他への分け隔てから離れ、一切諸法の自性についての平等性を志して、すでに般涅槃しながらもなお世間に留まり続ける彼ら（菩薩）には、愛好ないし嫌悪する対象に対する増益がないのだから、一体どうして、顛倒（自我への執着）に由来する貪などが生じうるだろうか。〔否、生じない。〕

[傍論：顛倒した貪の放棄と顛倒なき貪としての大悲]

また言う――

（慈悲の潜在慣性力）

全ての過失を生み出す有身見という薪を燃やし尽くし、自と他という分断を根こそぎにした境をもつ者たちには、過失の生起がない。あたかも (iva) 魔術 (vidyā) によって幻の人たちが行為に駆り立てられるように、智者たちはすでに過失を離れているが、過去の (purā) 誓願に基づき、悲によって行為に駆り立てられる。ちょうど、ろくろが回転する際の慣性力 (āvega) のように。(第八偈)<sup>113</sup>

（声聞：ろくろもいつかは止まる）

<sup>113</sup> この偈は例えば Bhavyakīrti (D1793)、Nāgabodhi (D1840)、Lakṣmī (D1842) によって引用される。D1793, 43b2-3: ji skad du | skyon rnams skyed byed 'jig tshogs lta bu'i bud shing sreg byed gang || rang gzhan bye brag yul rnams rtas nas 'don byed de rnams skyon med de || skyon med pa yang thugs rjes sgyu ma'i skyes bu las la 'jug || blo bzang sngon gyi smon lam dbang gis 'khor lo 'khor bzhin gnas || zhes 'byung ngo || ; D1840, 41a3-4: nyes pa thams cad skyed byed 'jig tshogs lta bu'i bud shing dag ni bsregs gyur cig | bdag gzhan bye brag yul rnams drungs phyung gang yin de la nyes pa 'byung ba min || nyes pa med kyang blo bzang sgyu ma'i mi ni rig sngags lta bu'i snying rje dang || sngon gyi smon lam dbang gis 'khor lo'i rnam pa bzhin du las la skul bar byed || ces bshad pa'o || ; D1842, 192a1-2: ji skad du | gang zhig ma lus skyon rgyu brtag pa'i lta ba bud shing sreg par mdzad || rang dang gzhan gyi dbye ba'i yul ni rtas med skyon rnams skyon med la || skyon med thugs rje'i rig pas sgyu ma'i skyes bu las la blo ldan pa || sngon gyi smon lam dbang gis 'khor lo bskor ba bzhin du las la 'jug ||. 第八偈では、慈悲による衆生済度の行いが幻術の譬喩を用いて語られるが、同様の所説はたとえばカマラシーラの『中観光明』(D3887, 222v1-223r5) に見られる。後者はアバヤーカラグプタの『牟尼意趣莊嚴』(Skt. Ms. 66r1-6) に借用され、そこから梵文が回収される。加納・李 2021 参照。

【声聞】 そうだとすると、誓願や悲の余力 (ākṣepa) が尽きることにより、無辺の円満たる普賢の境地 (samantabhadratā) が尽き、浄化は究極なものではなくなるだろう。まさにろくろの回転の比喩によって。たとえば、壺作りによって付与された慣性力 (saṃskāra) が尽きることで、ろくろの回転が止まるように、同様にそれ（誓願の慣性力）にも、[停止が] あることになるだろう。

（大乘：譬喩はあくまで譬喩にすぎない）

【大乘】 一体どうして全ての比喩の性質が、喩えられる対象に合致する [必要がある] だろうか。この両者（譬喩とその対象）の一致は全面的にあるわけではない（譬喩はあくまで譬喩にすぎない）。というのは、爪や牙などという虎の全ての部位を完備しているゆえに [勇敢な人間が] 「人虎」 (puruṣavyāghra) と呼ばれるわけではなく、そうではなく (kiṃ tarhi)、ある特定の勇敢さなどを有しているゆえに [その勇敢な人物は人虎と呼ばれるからである]。この場合も、壺作りのための努力が終わったあとでもろくろの回転が [続くように]、同様に悲は所縁を欠く状態になったとしても、所縁を伴う行為の結果が終了してしまうことはない、という、以上の限りのことが譬喩によって述べられたのである。以下の様に、

ただその人が近くにいるというだけで、如意宝珠から [宝が生じる] 如くに、望みのままに壁などからすらも諸々の教説が生じる<sup>114</sup>。

<sup>114</sup> *Ślokavārttika*, codanā, v. 138. Kataoka 2003: 20-23 参照。この偈はミーマーンサー学派からの一切智者たるブッダの説法のありかたへの批判を説くものである。ここでは、喩えられる対象に対して、譬喩を過剰に適用した誤った例としてこの偈が引用されていると理解した。すなわちブッダの説法は如意宝珠に喩えられるが、本来譬喩はあくまで譬喩にすぎず、譬喩の表現領域には限界があるにもかかわらず、もし両者が完全一致すると曲解するならば、如意宝珠と全く同様なありかたで、望んだままに壁などからすらも説法が出てくることを認めねばならないことになるという意図であろう。あるいはハリバドラの『現観莊嚴論光明』(p. 992.18-19)の引用例にならうならば、ここでは悲が所縁なきものとなった後でも望みのままに自由自在に説法をなすという意図とも理解しうる。*Tattvasārasaṃgraha* (D3711, 83a6)の引用例は後者に近い。

という。

（慈悲の永続性）

さらに「なぜ普賢の境地（samantabhadratā）が永続するのか」というこのことについては特定の原因が説かれなければならない。それは[次のように]言われる——

（無顛倒なる潜在慣性力）

**無感覺者（身体）・感覺者（心）の基盤をもつことに応じて、潜在慣性力には[非永続と永続という]違いがある<sup>115</sup>。[そして心の潜在慣性力については] 顛倒・無顛倒の対象を持つことに応じて、滅と非滅とがある<sup>116</sup>。（第九偈）**

というのは、踊りなどの身体的な潜在慣性力は、訓練をやめると、長期の持続<sup>117</sup>が見られないからである。一方、心的な[潜在慣性力]は、その到達点を理解したならば（tadarthāvbodhe）、[所定の]対象を超えた時でも持続する（viṣayādhikakālānuṣāyin）<sup>118</sup>。だから（iti）まず、無感覺・感覺なる所依をもつ両者の潜在慣性力には違いが定められる。

**【声聞】**しかし感覺的な（心的な）所依をもつ潜在慣性力（悲心の勢い）もまた究極的に持続するもの（avasthāyin）ではない。だから（iti）[大悲という心的活動が] 究極的に止まないこと（永続すること）について、我々は斥ける。

<sup>115</sup>つまり、訓練で得られた踊りなどの身体的な技能は練習を止めると失われるが、心の鍛錬の成果は失われることがないという意味で理解した。

<sup>116</sup>つまり、心の鍛錬の成果（潜在的慣性力）は、顛倒した対象を持つときには失われるが、顛倒なき対象を持つときには失われない。すなわち菩薩の悲心には顛倒も忘却もないので、停止することなく永続する。

<sup>117</sup>「長期の持続」（cirānuvartī）と訳した語は、「長期の結合」（cirānubandhī）という写本の読みを保持してままでも理解は可能である。

<sup>118</sup>ここでは、身体技能や能力は訓練次第では衰えることがあるが、悲心たる精神的能力は訓練を続けなくても永続するといえる。

【大乘】 それ（潜在慣性力の永続性）もまた斥けられてはならない。なぜならば〔心的な潜在慣性力は〕無顛倒なるものを対象としているからである。というのは、顛倒を離れていない間、その間だけは、繩を蛇だとする〔錯視の〕認識がある。しかし、ひとたびそれ（錯視）を離れたならば（繩を繩だと正視したならば）、真実なる繩を対象とする潜在慣性力（saṃskāra、正しい認識能力の持続性）は堅固なものとなる。だから、再度の顛倒の発生（viparyāsavṛtti）はありえない。

【声聞】 忘れたしまったときには〔顛倒の再発が〕必ずある、というならば、

【大乘】 まず、「忘れる」ということは、いかにしてあるのか。

【声聞】 訓練を断つことによって〔忘れることになる〕、というならば、

【大乘】 [なるほど、]「訓練を断つことによって忘れ、そして忘れたときに顛倒が発生する」ということは妥当である。しかし、摩訶薩にとって、発願心以来（ā prañidhicittāt、衆生済度の誓願を發して以来）、〔顛倒ではなく〕真実に依拠した全ての所縁への大悲を続けて訓練する流れを断つことはない。彼にとって、〔訓練は不断であるゆえ、〕忘却と顛倒という二つのことはありえない。以上、究極的な、真実に沿った利他の潜在印象（vāsanā）に停止のないこと（永続性）が、立証された。だから、一切知者が一切の利益（自利・利他）を全うすることは、〔永続する大悲の慣性力に基づいて〕ありうるのである。以上、傍論は十分であろう。

（第七偈のまとめ）

それゆえ、道智者性（mārgajñatā）<sup>119</sup>によって浄化された、稀有な衆生たちの行い（菩薩たちによる慈悲の永続的な実践）は、稀有である。また、輪廻全体を愛着する心をもつ者（菩薩）たちは、〔自分自身を輪廻から〕救い出し、かつ人々を輪廻という海から救い出すので、〔彼らの〕方便善巧もまた稀有である。  
（未完）

〈キーワード〉 *Nayatrāyapradīpa*、Trivikrama、大悲

<sup>119</sup>「道智者性」については、上述の第7偈では、菩薩たちの三界に向けられた「貪」が道智者性によって浄められれば浄められるほど、その分だけ、菩薩たちの貪も最高の境地を得るための方便となる、と言い、その注釈には、菩薩たちが貪などに背を向けることなく無上の境地へと赴くことが、摩訶薩たちの道智者性である、と言う。

参考文献一覧

(略号)

- Jñānālokāṃkāra*. T. Kimura, N. Otsuka, H. Kimura, H. Takahashi (eds.), *Sarvabuddhaviṣayāvā-tārajñānālokāṃkāra nāma mahāyānasūtra*. Sanskrit Text. 小野塚幾澄博士古稀記念論文集『空海の思想と文化』、2004年、1-89.
- Tattvasaṃgraha* = E. Krishnamacharya (ed.). *Tattvasaṃgraha of Śāntarakṣita with the commentary of Kamalaśīla*. Baroda, 1926.
- Prasannapadā* = A. MacDonald (ed.). *In Clear Words: The Prasannapadā, Chapter One. Vol. I. Introduction, Manuscript Description, Sanskrit Text*. Vienna: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2015.
- Bodhicaryāvatārapañjikā* = P. L. Vaidya (ed.). *Bodhicaryāvatāra of Śāntideva with the Commentary Pañjikā of Prajñākaramati*. Darbhanga: Mithila Institute, 1960.
- Bhāvanākrama I* = G. Tucci (ed.). *Minor Buddhist Texts, part 2: First Bhāvanākrama of Kamalaśīla, Sanskrit and Tibetan Texts with Introduction and English Summary*. Rome: IsMEO.
- Laṅkāvatāra* = B. Nanjio (ed.). *The Laṅkāvatārasūtra*. Kyoto: The Otani University Press, 1923.
- SDhNS* = \**Sarvadharmāṅśvabhāvatāsiddhi*, D3889. See Moriyama 1985.

(和文)

磯田熙文

1979 「『Nayatrāyapradīpa』について」、『印度学仏教学研究』28-1、408-411頁。

一郷正道

2011 「瑜伽行中観派の修道論の解明—『修習次第』の研究—、科学研究費基盤C成果報告書。

加納和雄・李学竹

2020 「声聞による大乘の真実観批判—Nayatrāyapradīpa 梵文校訂と訳注（1）—」、『駒澤大学仏教学部論集』51、77-102頁。

2021 「梵文校訂『牟尼意趣莊嚴』第一章 (fol. 64r2-67v2) —『中観光明』佚文・行者の直観知と無自性論証—」、『密教文化』246 (印刷中)。

酒井柴朗

1985 「密教要文の一節（1）—真性心髓集に引用される菩提心積について—」、『密教文化』

(130)

声聞の離欲と菩薩の大悲（加納・李）

151、1-9 頁。

生井智紹

1996 『輪廻の論証—仏教論理学派による唯物論批判—』、小林書房。

外菌幸一

2020 和訳「ラリタヴィスタラ（改訂版）」（第16～18章）、『国際文化学部論集』20-4、371-404 頁。

宮林昭彦・加藤栄司

2004 『現代語訳南海帰寄内法伝—七世紀インド仏教僧伽の日常生活—』、法蔵館。

(欧文)

Eltschinger, Vincent

2011 Studies on Dharmakīrti's religious philosophy (3) : Compassion and its role in the general structure of PV II . In: *Religion and logic in Buddhist philosophical analysis. Proceedings of the Fourth International Dharmakīrti Conference. Vienna, August 23-27, 2005*, ed. H. Krasser, H. Lasic, E. Franco, B. Kellner, Wien 2011, 43-72.

Kataoka, Kei

2003 Kumāriḥa's Critique of Omniscience. インド思想史研究 15 : 35-69.

Moriyama, Seitetsu

1985 An Annotated Translation of Kamalaśīla's *Sarvadharmāṇiḥsvabhāvasiddhi* Part IV . 佛教大学研究紀要 69 : 36-86.

Szántó, Péter-Dániel

2020 The Road Not to Be Taken : An Introduction to Two Ninth-Century Works Against Buddhist Antinomian Practice. Christina Pecchia and Vincent Eltschinger (eds.) . *Mārga : Paths to Liberation in South Asian Buddhist Traditions*. Vienna : Austrian Academy of Sciences Press, 109-124.

Wedemeyer, Christian K.

2007 *Āryadeva's Lamp That Integrates the Practices Caryāmelapakepradīpa : The Gradual Path of Vajrayāna Buddhism According to the Esoteric Community Noble Tradition*. New York : Columbia University Press.

(謝辞：梵本の校訂に際しては、苜米地等流、種村隆元、倉西憲一、Harunaga Isaacson、Péter-Dániel Szántó、Bang Junglan 各氏よりご教示を賜った。梵文写本の確認に際しては李学

竹氏にご協力頂いた。記して謝意を表したい。李氏と加納で共同で作成した梵文翻刻に基づいて、加納が校訂と訳注を作成し、序文を執筆した。令和3年度科学研究費 [17K02222] [18H03569] [18K00074] による研究成果の一部。)